

えんぽとたんぽの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 200 号	2018年3月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：原谷 一誠
---------------------------	--------------------	--

1. 活動報告（事務局 記）

—3月4日（日）会員13名が参加しエコアップとして、ため池のカヤツリグサ類、外来種の除去を実施しました。

作業前には、29日に開催する監査および役員会についての話がありました。

—3月17日（土）会員12名が参加し、水路の整備（道路沿い）とエコアップとして湿地帯の除草を行いました。

休憩時には、関根会員が持参したドローンで空から集合写真を撮りました。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎来訪者

予定はありません。

◎行 事

—3月29日（木）14時より二俣瀬ふれあいセンターにて 会計監査・役員会議

—4月1日（日）平成30年度総会（二俣瀬ふれあいセンター）

—4月21日（土）親子自然観察隊決隊式及び食べられる野草

3. 来訪者の声

今回はありません。

4. 会員の声 「会報第200号特集」

会員の声ー1 「会報第200号の発刊について」（相談役 今井和男）

会報第200号発刊おめでとうございます。

編集責任者原谷さん・各編集委員の皆様に深く敬意を表します。

2001年5月の第1号から200号の発刊まで、毎月1回の発刊がされましたが、長いようで短い18年であった感であります。各種のご協力につきまして、改めて深くお礼を申し上げます。

200号の発刊を振り返って見ますと、ビオトープの造成から大水車の通水と完成、2004年4月自然環境功労として「環境大臣表彰」、2009年3月日本水環境学会（山口大学）の表彰、さらに2002年9月衆議院文部科学委員12名の視察、また活動のなかでは、2003年4月子供たちと保護者を対象とした「里山自然観察隊」の発足し、体験学習を実施したこれらは特筆にあたります。

終りに、この会報がいつまでも発刊がされますよう、会員の御協力を期待するものであります。

会員の声ー2 「おくになまり」 (内藤武顕)

17日間にわたって、熱戦を繰り広げた雪と氷の祭典が2月25日幕を閉じた。

記念すべき冬季五輪とタイムリーにビオトープ会報が200号を飾ることになった。

うれしい限り心よりお祝い申し上げたい。無名のまち、北海道北見市常呂（ところ）がカーリングの街として今、脚光をあびている。選手たちの底抜けの明るさと北海道なまりが人気となった。「そだねー」などのやりとりやハーフタイムに車座でフルーツを食べる〈もぐもぐタイム〉は日本で癒しのブームを巻き起こした。本人たちは自分のイントネーションがそこまでなまっているとは気づかなかった様子、それが故郷なまりだろう。

先日夢を見た“ビオトープの東屋が藤沢五月さんとの会話の場となっていた。「そだねー」を生の声で聞きながら盛り上がったところが放映された。

全国から二俣瀬ビオトープ会員の希望者が殺到した“・・・正夢であってほしい！

昭和39年（1964）「あゝ上野駅」（作詞関口義明）その二番の歌詞を記載する。

「就職列車に揺られて着いた 遠いあの夜を思い出す 上野は俺らの心の駅だ 配達帰りの自転車を とめて聞いている国なまり」 こんな時代もあった。万感迫る思いで聞いた唄である。

会員の声ー3 「ビオトープ感想」 (阿部真希子)

二俣瀬の活動に初めて参加させていただいたのは、五年前の春でした。私は福岡の田舎で生まれ育ち、実家の田植えを手伝ったこともあり、自然の中での体験なんて、今更物珍しくもないだろうと思っていましたが、その考えは大間違いだったとすぐに気づきました。

美しい自然環境の中で食べられる野草を探したり、野鳥の名前や昆虫の名前を学んだりと今まで知らなかったことや初めて体験することがたくさんあり、童心に返ったような気分で毎回参加させていただきました。山口県の豊かな自然環境に触れることで、生物多様性の保全の重要性について再認識するとともに、これからは私たちが主体となり継承していかなければならないと感じております。この四月より社会人となり、自然を守るというよりも破壊しうる立場となるのかもしれませんが、そうならないように今まで学んできたことを忘れずにこの経験を活かしていけたらと思います。大学生の間にこのような貴重な経験のできる機会をくださった皆様には大変感謝しております。宇部で様々な方々にお世話になり、育てていただき、たくさんのことを学んだ充実した学生生活でした。今まで本当にありがとうございました。

会員の声ー4 「ビオトープのこれから」 (副会長 田村勝芳)

里山ビオトープ二俣瀬をつくる会も18年になりました。この会のコンセプトである自然環境教育の場、市民憩いの場、二俣瀬のアピール、の役目は十分果たして来たと思います。しかしながらビオトープのシンボルマークとなっていた5mの水車が軸受のトラブルがあり停止したままの状況になっています。設備の老朽化と発足時の会員の高齢化が進みこれからのビオトープの維持管理は危機的な状況になっています。市民への自然環境教育の場は従来の行事の中で十分果たしていると思いますが設備の補修工事には資金調達が必要です。関係者各位に打診していますが難しい問題です。200号記念の会報を機会に多くの人々が関心を持つてもらいビオトープの活動が継続していける事を会員で考えていきたいと思っています。

会員の声ー5 「200号に寄せて」 (事務局長・山口大学 関根雅彦)

2000年9月に発足した「ビオトープ二俣瀬創造の会(仮)」。私は学識経験者のアドバイザーという立場で末席に座っていました。当時まだあまり知られていなかった「ビオトープ」という言葉。生物が一生を終えられる場所といった意味ですが、当時は都会の校庭などに造るものという考えが主流でした。自然豊かな二俣瀬に、なぜ「ビオトープ」を造るのか？集まったボランティアメンバーの熱い議論を経て、これまた当時意識され始めたばかりの「里山」保全をコンセプトに掲げ、ほとんど人力で「里山ビオトープ二俣瀬」を作り上げたのです。力を合わせればこんなに大きなことができる。この経験は私にとっても大きな驚きでした。その感動が、私をアドバイザーから会員に変えたのです。会報は、通水式が行われた2001年5月に第一号が発行されています。それから17年、ビオトープ建設当時の熱い記憶が、会報200号に至るこれまでの活動を支えてきたと思います。この間、2015年に会長が今井和男さんから原田賢治さんに交代し、事務局も、原田満州夫さんから私を事務局長とする4人体制へと変わりました。来年度には役員にも新しい風が吹き込んできます。そろそろ、熱い記憶ではなく、今のビオトープのありのままの姿の中に活動の意味や楽しみを見出し、新たな一步を踏み出す時だと思っています。会員の皆様、どうか、それぞれの今のビオトープへの思いをぶつけあって、300号に向かってより楽しい、より意義深い活動を、いっしょに続けていきましょう。

5. ビオトープ関連：「山口県の昆虫たち」 (管 哲郎 記)

(27) アカスジカメムシ *Graphosoma rubrolineatum* Westwood

カメムシ目(半翅目) カメムシ科

日本全土に生息している黒地に赤い縦筋の入った美しく目を引くカメムシです。体長は10～12mmほど、セリ科の草花や菊の花に集まるようで、初夏～秋にかけて見られます。

野菜ではニンジンがセリ科ですので、農家にとってニンジンの葉を食べる害虫となっています。秋になるとやはりセリ科植物であるハナウド、セリ、アシタバ、ヤブジラミなどの花を探したほうが良いかもしれません、筆者は秋吉台でオミナエシに訪花した本種を確認(写真)しています。



オミナエシで吸蜜するアカスジカメムシ



ヒメジョオンの花に来た

6. 会よりの連絡事項

1) 駐車場の指定について

4月1日の総会の日当日永山酒造にて蔵びらきが有ります。市民センターに沢山駐車されますのでビオトープの会員の方々は北側(裏側)にまとめて駐車願います。

2) 会計より

当日年間会費を徴収いたしますので宜しく。出席できない方は近くの会員に預けていただければ非常に助かります。

7. 編集後記

最近季節を感じる事が少ないのはなぜだろうと思ったとき、ビオトープの維持活動に参加していないからだ気がついた。2月3月と参加できないまま過ごしたら、ものすごく自然と遠ざかった気がしてならない。やはり、維持活動に参加しないと。

凍てつくような寒さの中、焚火で焼き芋を焼いたり、水分をたっぷり含んだ重たい雑草を一輪車に積んで運搬する作業をしたり、作業のあいまにカエルの卵やフキノトウを見つけたり、といった時間を過ごさないと。

維持活動のあいまには、色とりどりのかきもちを焼いたり、レトロな鉄瓶でお茶を沸かしたりして談笑し、つかの間であるが昔ながらの里山の暮らしを体験させていただいている。こんな体験は「つくる会」の会員にならなかつたら、日常的には経験できないであろう。

「つくる会」の活動も二十年近くになり、会員も高齢化してきている。ぜひ、観察隊の卒業生は「つくる会」の活動にシフトし、維持活動に関わっていただけたらと思う。

(中本 亜矢子 記)